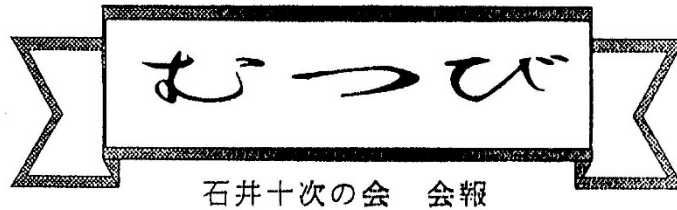


2021年
(令和3年)
3月12日



282号

「相信相愛」の心で、未来を生き抜く子供たちを育む

宮崎市立西池小学校長 山口 昇

私は、「相信相愛」の言葉を、常に勤務した学校の校長室に掲げ、大切な「座右の銘」としている。教育の基盤は、児童生徒、教職員、保護者、地域の方々等、学校教育に関わる全ての人々が互いに信頼し合うことや、互いを思いやることであると考えからである。このことを常に心に抱くことで、人の心を疑い、人の行動を非難しながら生きていくことは、いかにネガティブで創造性の欠如に結び付くことにも気付かされた。そして、コロナ禍で様々な人が、「新しい生活様式」に基づき、自らの行動を律するよう求められる中で、疑心暗鬼の心情から他人への誹謗中傷も少なくない今日、苦難に直面したときの人としてあるべき心に一筋の光を射す言葉でもあると考える。

平成26年から翌年までの2年間、西都市立茶臼原小学校で勤務させていただく中で多くのことを学ばせていただいた。本稿ではそのうちの2つを紹介させていただく。

一つ目は学校に対する人々の思いの継承である。今を遡る133年ほど前、軍馬を養成する放牧場もあった茶臼原台地に、岡山孤児院を創設し児童福祉の道を拓いた石井十次先生は、60町歩(約60ha)の土地を求め、理想の教育の実現に向けた歩み始める。それから16年間かけ、重機等もない中で、子供たちと協働で木を切り倒しその根を取り去るなどの苦労を続けながら開墾を進め、200町歩(約200ha)まで土地を広げる。その土地の一角に私立の茶臼原小学校が開校した。藁葺きの粗末な校舎であったようだが、開墾に明け暮れた子供たちにとって、心から大きな喜びを感じる学舎であったに違いない。その後一旦は学舎の灯は途絶えるものの、昭和20年に開拓者が入植して新たな生活が始まる中、子弟教育とともに文化発信の中心となる学校設立に向けた運動が始まる。そして、校地として石井記念協会から3町歩(約9000坪)の無償譲渡を受け、昭和22年1月25日に新たな

茶臼原小学校の開校式を迎えることとなる。校舎は、県農業大学校の前身である県農民道場の宿舎を移転したが老朽化が著しかったことから、床の張替えや壁修理、ガラスはめ込みの工事は6割以上を入植者の寄付で賄った。また、運動場の遊具施設や教材備品等は保護者の奉仕作業で整えていった。農地開拓に加えて、学校施設を整える奉仕作業や、僅かな収益から寄付を行うなど、学校設立とその教育活動の充実に向けたエネルギーは凄まじいものだったに違いない。学校とは、人々の熱い思いが脈々と受け継がれている場である。県内に361校(令和2年4月1日現在)の小中学校が存在するが、どの学校にも先人の思いが様々な形となって継承され続けていることを忘れてはならない。

二つ目は、石井十次先生の「レジリエンス」(折れない心、折れても立ち直る心)である。先生は、児童福祉の道を切り拓かれた偉人であるが、その道に進むまでは紆余曲折の道をたどる。海軍士官を目指すが病により断念し、西郷隆盛に心酔し農地を開墾して理想郷づくりに邁進しようとしたところ農民の反対を受ける。時に教師や役人として過ごす日々も経験し、医者として身を立てようとする中で、児童福祉の道を見出し自らの全てを捧げていく。その人生の歩みこそが子供たちの道標となり、現在のキャリア教育に結び付くと考える。

学校教育では、子供たちに将来の夢をもつことや、夢の実現に向けて努力することの尊さを教えるが、自らの努力と運を生かし夢の実現とともに人生を歩む人は、はたしてどれだけいるだろうか。未来を生き抜くためにも折れた心の癒し方や、折れた心を立ち直らせ、新たな道を進むことの尊さについてもっと学ばせるべきではないだろうか。新学習指導要領の前文には、「これからの学校には、一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と記されているが、このことは、石井十次先生の生き方と相通じていると感じる。

コロナ禍の収束に向けた取組や少子高齢化問題、地球温暖化等の環境問題等、解の見出せない課題が山積する社会ではあるが、その社会をたくましく生き抜く子供たちを育むために、これからも「相信相愛」の心を大切にしていきたいと考えている。



鈴木馬左也は石井十次より4歳年上である。官吏から民間に投じ、住友の総理事（社長）を19年間勤めた。彼も十次を支えた先人のひとりである。

1. 鈴木馬左也の書簡

石井十次資料館に鈴木馬左也が茶臼原孤児院宛に出した書簡が展示されている。

大正6年11月、十次の没後3周年記念式典及び墓碑除幕式への招待状を受け取ったが、多忙のため参列できない旨を丁寧に陳謝している。生前の十次との親密な関係をうかがわせる書簡である。

「謹啓（中略）故石井院長ご逝去後満三ヶ年記念会並びに墓碑除幕式ご挙行の故をもって来三十日参列方ご案内をかたじけなくし、謝したてまつり候。然るに何分多忙にして餘日とぼしく、遺憾ながら参列いたしかね候あいだ、悪しからずご諒承願いたてまつり候。就いては誠に軽少ながら金拾円ご寄贈つかまつりたく存じ申し候。（中略）何卒ご受領の上、右費用の一部にお充て下されたく希上げ候。 拜具 鈴木馬左也」

2. 馬左也の生い立ち

馬左也は文久2年（1861）2月、高鍋城下の横筏に秋月種節の4男に生れた。9歳で鈴木家に養子に行く。藩校明倫堂で学んだ後、鹿児島県医学校に入学。明治16年に東京帝大政治学科に学び、卒業して内務省に入った。明治22年愛媛県書記官として出向。愛媛県新居浜市は住友家発祥の地で、別子銅山を所有していた。馬左也は住友家と付き合う機会が多かった。住友家は清廉潔白で能力ある馬左也を見込み住友への入社を懇請した。住友家の家長・住友吉左衛門は、会社の経営は社員にまかせ「金は出すが口は出さぬ」経営方針を貫いた。当時の住友の総理事は維新の志士としても知られた伊庭貞剛だった。彼は剛腕をもって住友の近代化を図った。

3. 馬左也、住友に入社

明治29年、36歳になった馬左也は住友に入社した。当時は官尊民卑の風潮が強く、官吏が民間に行く例は少なかった。しかし薩長の藩閥政治は存在しており、日向出身の馬左也が正当に評価されるか疑問だった。むしろ民間に活躍の場を見出したいと考えたのである。入社すると新居浜の別子鉱業所支配人となる。岡山孤児院のために、四国一円の寄附金集めの事務局を新居浜の鉱業所に置いた。

そのころ住友は受難の時代を迎えていた。明治32年、別子銅山は台風による豪雨被害を受け、大水害が発生。家屋倒壊122戸、死者513人という大惨事に、馬左也は不眠不休で当たった。

別子銅山は以前から煙害という公害問題を抱えていた。解決策として精錬所を四阪島に移したが煙害は続いた。地元の農民や愛媛県との補償交渉が明治43年まで続き、住友が多額の賠償金を支払うことでようやく決着した。その間、馬左也は交渉の前面に立ち続けた。

馬左也は冷静かつ慎重な性格であったが、時には果敢な行動に出た。別子銅山には前近代的な飯場制度があり飯場の頭分が鉱夫の給金の上前をはねるなど弊害が多発した。馬左也は改革に着手したが、強硬派は頑強に抵抗しプロの扇動家も加わり暴徒化した。新居浜市内は暴動寸前となった。馬左也は意を決して一計を案じ、陸軍・善通寺師団をたずねた。師団長は彼の要請を容れ、演習の名目で完全装備の部隊に命じて新居浜市内を行軍させた。暴動はたちまち沈静化し、街には平穏が戻った。

明治37年7月、44歳になった馬左也は伊庭貞剛のあとを継いで住友の総理事となる。彼は住友のさらなる近代化と多角化をはかった。従来の金属、鉱業のほか、金融、商事、林業、電力、肥料にまで事業を広げた。学術にも目を向け、東北帝大の本多光太郎を支援し、世界最高の強力磁石鋼KS鋼の開発に貢献した。

4. 馬左也が総理事を務める住友は多額の寄付金を孤児院へ

馬左也は多忙のなかでも十次への支援を忘れなかった。明治44年、住友は馬左也の発案により同年6月から毎月150円の寄付金を向こう3年間岡山孤児院に贈ることを決め、十次に通知した。大正11年3月、総理事の激務の中、馬左也は脳溢血で倒れた。12月25日逝去。享年62歳。早すぎる死であった。社葬を大阪の住友本社で行い、棺を夜行列車で高鍋へ運び、30日に高鍋で本葬を営んだ。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【門川町】 児玉 恵

【西都市】 川崎 年治

★ご寄付をいただきました（敬称略）

（奨学金）

【日向市】 山口 久和

★1/21～2/20 の資料館来館者

団体・グループ 14人

個人 なし 合計14人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により2月20日までのものとしています。

★4月号の通信発送作業

4月12日（月）9時から印刷・製本

13日（火）9時から製本・発送

通信の発送作業のお手伝いをしていた
だけのボランティアの方を募集しており
ます。簡単な作業です。興味のある方は
下記までお問い合わせください。

また、令和3年度の予定表を同封して
おります。ご確認ください。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の
個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社
後援会「石井十次の会」

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@ki-jo.jp

天神社を訪ねる

石井十次少年の優しい心と母親の日頃の教育を物語るエピソードとして有名な「縄の帯」舞台の天神社を訪ねました。



（「縄の帯」・「朝晩学校」舞台の天神社）

ここは、地区の天神社（天満宮）の夏祭りに友達と交換してやった「縄の帯」の舞台となった神社です。

そして、十次が医学生だった20歳のとき休暇で帰郷するや地域の同意を得て「馬場原教育会」を立ち上げます。教育会には3つの柱があり、

- ① 18歳以上で貧しくても志があるものへの県外への遊学援助。
- ② 昼間は働き朝晩の余暇を利用しての勉学。つまり朝晩学校の開設。この朝晩学校の舞台も天神社です。
- ③ 書籍の貸与。

朝晩学校は、十次が岡山に戻っても問題ないように留守役を置く。勉学に熱意のある5人の仲間を岡山へ遊学もさせている。このことから人材養成の気構えが十分うかがえる。

残念ながら、現在は改築され地区民の集会所となり利用されています。当時の風情はありません。

※ 編集後記

巻頭は山口昇氏からの玉稿をいただきありがとうございました。 文責 生駒